



読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記াতেにお送りいただけます。このほか、カッパ・ブックスで、どんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、ぜひあわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書き添えてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社出版局

神吉晴夫

●郵送料がバカ高くなりました。
お近くの書店でお求めください。

ゴリラ探検記 赤道直下アフリカ密林の恐怖

昭和36年8月20日 初版発行
昭和36年9月25日 8版発行

¥ 250



著者 河合 雅雄
愛知県犬山市栗栖
発行者 神吉 晴夫
印刷者 山元 正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替 東京115347

落丁本、乱丁本ま本社でお取替えいたします。 [小泉製本]
表紙の模様・意匠登録116613
© Masao Kawai 1961

リラ探検記

—赤道直下アフリカ密林の恐怖—

河合雅雄^{かわいまさお}著



カバ―のデザイン・伊藤憲治

まえがき

この本は、一九五九年四月から、約六カ月にわたって行なわれた、「財団法人日本モンキーセンター第二次ゴリラ探検」の記録である。調査地は、主として中央アフリカのウガンダ西南部と、コンゴ、ルアンダ・ウルンデュー三国の境にあるゴリラの聖域^{サンクチュアリ}であった。そのほか、コンゴ東部、ウガンダ西部で、チンパンジーをふくめての予備調査を行なった。赤道直下の地帯である。

私にとって、アフリカの半年の生活の記憶ほど、あざやかで克明なものは、ほかにない。アフリカを思うと、今でも、あやしく胸がときめくのを覚える。ゴリラの怒りに燃えた絶望的な顔が間近^{まぢか}に見え、肺腑^{はいふ}をえぐる咆哮^{ほうこう}が聞こえてくる。深い密林や果てしないサバンナ（木のはえている草原）の生活を生き生きと肌を感じつつ、細部に至るまで当時のことが再現できるのは、印象があまりに強烈であったからであろう。

相手が怪物^{モンスター}のゴリラであっただけに、調査の毎日が生命を賭けた迫撃戦^{はくげきせん}であった。そして、森の中では、私は人間の特権を剥奪^{はくだつ}された無防備の一匹の獣^{けもの}にすぎず、荒々しい野獣の前におののく小さな魂であった。だが、サバンナとジャングルの生活が、どんなにすばらしいものであったかを知った今、野生の叫びにこたえる、自制のおよばぬ原始性の疼^{うず}きが、私をまたアフリカの

野獸の国へ呼びもどすだろう。

しかし、さらに激しく私をジャングルの奥へ誘惑するのは、「ゴリラがそこにいるからだ。」という性質のものではない。それは、「生きた化石^{かせき}」とでも言うべき、人にもっとも近い動物、マウシテンゴリラの研究から、人類の歩んで来た道を探ろうという探求への情熱である。

人工衛星が飛び、宇宙時代を迎えて、人々の関心が今ほど強く人間の未来像を描くことに向けられた時代はないだろう。だが、人はいったいどこから来たのか、どういう進化の道筋をたどって、現在の人に至ったのかが解明できなければ、人間の未来像も描けないのではなからうか。遠き未来は、遠き過去を知ることによってあきらかにされるであろう。

進化といっても、私たちは形態の進化を問題にするのではなく、動物の社会や生活が、環境との相互連関の中で、どのように進化してきたかを系統的に追求したいと考えている。それはまた、動物や人間の変化しうる可能性と方向について、多くの示唆^{しさ}を与えるであろう。こうした問いに答えてくれるのは、動物生態学や動物社会学といった学問であるが、この小著が、比較的新しいこの分野についての理解を助けることができれば幸いである。

ゴリラ探検をたった二人で行なったことについて、多くの人から驚きと不審を示された。探検というと、十人近い隊員が、多数の現地人を引きつれて行く光景を思い浮かべる人が多いからであらう。一時代前の探検や、今でも、山登りがそうである。そしてまた、化石人類の発掘や、南極

調査などは、たしかに重装備と多くの人を必要とする。しかし一方、未開人や動物の生活の調査は、一人か二人で、できるだけ長期間彼らの生活の内部にはいりこみ、とけこんで、対象を肉体化し感知する、という方法が必要であろう。近代探検はこの二つの方向に分極化していくだろう。「考える足」と、私たち「サル屋」はみずからをこう呼んでいる。私たちにとっては、高尚な議論や、大げさな装備は必要でない。最低、野帳フィールド・ノートとエンピツ、双眼鏡があれば、山の中へ飛びこみ、歩きまわることによって仕事を始めることができる。私たちの仲間には、こうして気軽にビルマや南米、アッサムの奥などへ独りで飛びだしていった。単騎遠征こそ、私たち霊長類研究グループの真髓しんずいなのだ。

しかし、こういうささやかな遠征でも、いや、ささやかであるだけに、資金の獲得が困難である。私たちもその例にもれなかった。その困難を押して、この小さな民間の研究所、日本モンキーセンターが、第三次探検まで実現させ、なお今後続行しようとしていることは、官学偏重へんちようのこの国においては、偉としてもよいのではなからうか。

それゆえ、私たちの探検の実現は、多くの人の深い理解と援助がなければ不可能であった。中でも、積極的にこのプランを押し進めてくださった、京都大学の今西錦司いまにしきんじ、宮地伝三郎みやじでんざぶろう両教授、日本モンキーセンターの伊谷純一郎さんいたにしゆんいちろう、心からなる援助を惜しまれなかった、日本モンキーセンターの渋沢敬三しぶさわけいざう会長、ならびに所員の方々、土川元夫つちかわもとお副社長をはじめとする名古屋鉄道株式会

社のみなさま、ご後援をいただいた中部日本新聞社、そのほか、いちいち名をあげる紙数がないが、ご協力を受けた方々に対して、厚く感謝の意をささげたい。

本書は、主目的であるゴリラに視点をあわせた。そのため、約九、〇〇〇キロにおよぶ、ケニヤ、タンガニイカ、ウガンダ、コンゴ、ルアンダ・ウルンデイーの五カ国にわたる旅の記録のほとんどを省略した。明けゆく暗黒大陸の現地人の姿や、広大なサバンナの動物や自然について、十分述べることはできなかったのは残念である。

なお、サルから人へという主題の、生態学的・社会学的展開について、紙数の関係で意をつくすことができなかったために、分かりにくい箇所も多いかと思う。こういう問題に興味をもたれる方のご参考までに、左記の本をあげておく。

今 西 錦 司 『ゴリラ』文芸春秋新社

〃 『人間以前の社会』岩波新書

伊 谷 純 一 郎 『人間以前の生活』（現代文化人類学Ⅰ）中山書店

おわりに、彷徨癖のある「考える足」の歩みを止め、熱心に執筆を慫慂し、ご尽力いただいた光文社の神吉晴夫専務をはじめ、伊賀弘三良カッパ・ブックス編集長、同編集部の渡辺英幸、荒井孝悦の諸氏に深くお礼申しあげる。

一九六一年七月二十七日

日本モンキーセンターにて

河 合 雅 雄

目次

まえがき……………	三
I ゴリラの聖域……………	二
うなぎ屋会談……………	二
ゴリラを追え……………	三
マウンテンゴリラとは？……………	五
しかし、だれが行くか……………	九
重い沈黙……………	九
準備……………	二〇
ゴリラと親友になること……………	二二
広大なアフリカ大陸へ……………	二三
もやに浮かぶムハブラの巨峰……………	二七
ゴリラに憑かれた老人……………	二九
まず小手調べ……………	三三
黒人の視線……………	三三
I 森の魔神……………	三七
最初のゴリラ捜し……………	三八
足跡発見……………	四〇
一〇メートル先に巨大な手……………	四三
八つの巢の意味……………	四四
第二回目の探検……………	四六
まっ二つに折られた巨大な竹……………	四九
猛烈にくさいゴリラの屁……………	五一
恐怖の咆哮……………	五一
体じゅうゴリラのフンだらけ！……………	五三
こみあがるアフリカ民族への……………	五三
親近感……………	五四
『ゲイシャ』という日本製罐詰……………	五六
悲しいフジヤマ、ゲイシャの日本……………	五七
家族の起源を求めて……………	五八
聞きだした十四頭の存在……………	六一
バンブー林にひびく……………	六一
ドラミングの音……………	六二
始まるか、ゴリラ同士の闘争……………	六五
偉大な鼻の穴……………	六六
雨に煙るジャングル……………	六八
ゴリラのなわばり……………	七〇
ささやかなわがキャンプ……………	七三

怪物マンヘイの正体……………	七四
おどりでたチーフゴリラ……………	七五
無情な「フィニッシュ」の声……………	七七
進化を阻むヘルメット……………	七八
バッフアロー出現す……………	八二
解けない足跡の謎……………	八四
凝視・緊張・へへへッ……………	八六
スケールの違うアメリカ女性の旅……………	八八
ふけゆくムハブラの夜……………	九二
さわやかな下界の味……………	九四
アメリカ隊との会見……………	九六
探検予定地の放棄……………	九八
恐るべきモックチャージ……………	一〇〇
夢を破るドラミングのひびき……………	一〇二
悪魔のように飛ぶ黒い……………	一〇三
マントの影……………	一〇三
撮影は失敗か？……………	一〇六
芽ばえる絶望感……………	一〇七
密林の彷徨……………	一一
水原君、ムハブラ登頂に成功……………	一二
おもしろい巣の形成……………	一二

ひとりゴリラ……………	一二四
一時が七時とは？……………	一二六
感激のフン採集……………	一二八
抜けられぬ密林の迷路……………	一三〇
人種を越える人間同士の心……………	一三三
ダイク君登場……………	一三五
ついに「森の魔神」を見る……………	一三六
定九郎の働き……………	一三八
ゴリラの性交体位……………	一四〇
静寂の恐怖……………	一四二
バッフアローの巣窟へ……………	一四三
自然を汚すもの……………	一四六
秘境ルアンドとの境に立つ……………	一四六
追跡、追跡、追跡……………	一三八
ごねるダイク君……………	一四〇
眠られぬ夜の回想……………	一四二
ゴリラの逆襲……………	一四五
戦術転換……………	一四六
ゴリラの総攻撃を受ける……………	一四八
あつ、水原君があぶない！……………	一五一
不可侵条約を破った人間……………	一五三

目次

身にせまる危険……	一五八
宿代をふみたおしたダイク君……	一五八
不気味な気配……	一六〇
さまよう生と死の間……	一六一
こみあげる涙……	一六三
生命の無事に乾杯！……	一六四
ボスを上手投でやぶる……	一六六
逃げたオカズ……	一六七
炉辺の語らい……	一七〇
誤った推理……	一七三
敵ながらあっぱれ……	一七六
折られた竹が語るもの……	一七七
ゴリラの言葉……	一七八
ドラミングの意味……	一七九
ゴリラのエネルギー源……	一八一
バウムさんの「脅迫」……	一八三
餌づけの夢破れて……	一八四
結納金はアンコーレウシニひき……	一八六
決死のアタック……	一八七
死者の顔・バッファロー……	一八八
山の倦怠期……	一九〇
森の魔神のひるね……	一九二

V

恐怖の山——サビニオ

必死の遁走……	一九四
泣きごとを言いだした トラッカー……	一九六
敗退……	一九八
探検地を変えよう……	二〇〇
バグとピンクのパンティー……	二〇一
巣・巣・巣……	二〇三
サルから人へ……	二〇四
巣が語る進化の謎……	二〇六
森から草原へ……	二〇八
類人猿研究の意義……	二〇九
シバの神と散髪……	二一〇
それはだれも言えない……	二二二
サビニオの草原へ……	二二六
行き過ぎた探求心……	二二八
縦横に走る野獣の道……	二三〇
恐るべきゾウの襲撃……	二三三
揺れる大地……	二三七
緑色の毒蛇インボマ……	二三九
十八頭の群れ……	二四〇

Ⅵ

ゴリラの方が観察者……………	二二三
ゴリラと人とゾウの鬼ごっこ……………	二二七
はいらずの森——カヨンザ……………	二四三

Ⅶ

小人のガイド……………	二四四
一番こわいものはなにか……………	二四六
カヨンザの森のゴリラ……………	二五一
ゴリラの文化……………	二五三
トレモロのカシェンゲ……………	二五六
チンパンジーを追って……………	二五八
カヨンザの火……………	二六一
美しきブワンブラキャンプ……………	二六二
河辺林を探る……………	二六五
反友好的なシンバ(ライオン)君……………	二六八
カモシカの天国……………	二六九
コンゴの旅……………	二七一
アフリカのスイス、キブ湖畔を 行く……………	二七二

Ⅷ

わが勘に狂いなし……………	二七四
可能なゴリラの餌づけ……………	二七八
カモになるアメリカ人……………	二八一
カボナのゴリラは食道楽……………	二八三
アイアム、ジュードウニダン……………	二八六
ジュース一本の旅……………	二八八
ゴリラの食物……………	二八九
巣とフンの話はこれでおしまい……………	二九一
ゴリラの群れは一夫多妻?……………	二九二
ゴリラは駆け落ちする?……………	二九五
家族ということ……………	二九八
アフリカよさらば……………	三〇一
なじみはみんな去った……………	三〇二
つれない洪水と地震のお見舞い……………	三〇三
キノロを去る……………	三〇七
湖底に行く……………	三〇八
ジープ転倒!……………	三一二
アフリカの「毒」……………	三二五

Ⅱ ゴリラの聖域



うなぎ屋会談

大きなクスサン（蛾^が）が一ぴき、金色^{こんじき}の鱗粉^{りんどん}をまき散らしながら、赤いネオンにぶつかっていた。きつと、鱗粉^{りんどん}がすっかりはけて、醜^{みにく}い裸身をさらすまで、この蛾^がは夜中ネオンにぶつかっているのだろう。晩夏の、疲れきって重い夜気に沈んだ体をけだるく動かして、人々はきたなく汗ばんだ顔をぬぐいつつ京の町を歩いている。その中で、マンボスポンの青年と肩をくんだ、エジプト人のような目をした素顔の少女の声だけが軽やかで明かるかった。

私たち四人は三條寺町^{さんじょうてらまち}のうなぎ屋へはいり、うす暗くてざわついている二階へ上がった。アフリカのゴリラの予備調査から、一カ月前に帰った伊谷純一郎^{いこじゅんいちろう}（日本モンキーセンター常任幹事、『日本動物（記）』2「高崎山のサル」（光文社刊）の著者）さんの歓迎コンパをし、今後の方針を決めようというわけである。

ニホンザルの研究が一段落したら、つぎは類人猿^{るいじんまへん}をやるう、というのが私たちの合言葉だった。なぜ、私たちはニホンザルや、危険をおかしてまで類人猿を研究しようとするのか。

一昨年（昭和三十四年）はダーウィンの『種の起源』が刊行されて百年目になるが、進化論に関する研究の多くは、形態学や遺伝学の方面からであって、動物の生活や社会、心理といった方面の進化についての研究は甚だ^{はなは}少ない。私たちは動物の生活や社会の進化を研究し、とりわけ、サルから人への道筋を、この方面から究明してみたいと考えている。

生活や社会の化石や遺物は残らないから、この方面の研究は方法的にむずかしい。このことが、今まで研究を阻^{はば}んできた大きな障害の一つであったが、私たちは現存のサル類の生態学的、社会学的研究から、相当なところまで肉薄できるのではないかと考えている。そうになると、サル類の中でも、もっと

も人に近い類人猿が、研究対象として登場するのは当然のことと言わねばならない。かくして、類人猿攻撃の幕は、一九五七年の川村俊蔵さん（大阪市大講師、奈良公園のシカ」の著者）のタイにおけるテナガザルの予備調査からきつて落とされた。翌五八年には今西錦司博士（京大教授、日本モンキーセンター理事、『日本動物記』の編者）と伊谷さんの二名による第一次ゴリラ探検が決行され、類人猿研究の機はしだいに熟そうとしていたのである。

「ゴリラちゅうのはどんなやつや、こわいか。」

と川村さんがきいた。伊谷さんは少し酔いのまわった顔を紅潮させながら、

「ごっついぜ。そいつが近くから、いきなりものすごい声でばえよるねや。魂をゆるがすような声を浴びせられたら、体が宙返りしたかと思うぜ。ほんまにこわい。ほんまにこわいぜ。真黒なモンスター（怪物）やな。」

川村さんはフンと鼻をならし、

「そらこわいやろな。せやけどおもろいやろな。」と独語（ひとりごと）を言うようにつぶやいて、にたにたと笑った。

「チンパンジーはどうだった。」と私は聞いた。

「チンプはな、ウガンダの西南にあるカヨンザの森にいよった。ゴリラもいるしおもしろい所や。しかしごっつい森やぜ。一回は攻撃（アタック）せにゃいかん所やな。それから、ミケノ——知ってるやろ。ビンガムがゴリラを調査しよった山や——の西にニイラゴンゴという火山があるけど、チンプはその下の森になんぼでもいよる。そやけど、ごっつごつした溶岩の山で、とうてい歩けんから、調査（サバイ）は無理やな。」

ゴリラを追え

伊谷さんは一センチほどになったタバコを口をとがらせてすいながら、興奮した面もちで言った。

私たちはゴリラとチンプのどちらに調査の重点をおくべきかを熱心に議論した。どちらが進化してい

るかとなると、いちがいには言うことはできないが、解剖学的にはゴリラの方がずっと人間に近いと言われている。霊長類の解剖では第一人者であるシュルツ博士によると、五十七の人間的な解剖学的特徴をとって類人猿とくらべてみた場合、そのうちゴリラは二十三、チンパンジーは十二が人間と同じであるという。そして、いろんな解剖学的類似点を比較すると、人とゴリラの差の方が、チンパンジーとオランウータンとの差よりも小さいということであるから、類人猿の中でもとくにゴリラが人に近いと言えることができる。

しかし、知能や社会生活という点になると、どちらがすぐれているかまだ勝負がついていない。チンパンジーの知能については、有名なドイツの心理学者ケーラーの「チンパンジーの知恵試験」をはじめとし、アメリカのヤーキーズ研究所でも、ずいぶんめざましい研究がなされている。しかし、ゴリラに

なると、ほんのわずかしが研究がないから比較のしようがないのである。

野生生活はどうかというと、ゴリラもチンパンジーもよくわかっていない。とくに私たちの興味の中心である社会生活の研究は、まったく今後に残されている。

重要性という点からはこの二者は甲乙がつけがたいが、未知の度合からいっても、モンスターの性格からいっても、ゴリラの方が魅力的であった。それに、樹上生活が主であるチンパンジーよりも、地上生活者であるゴリラの方がずっと調査が容易である。

人類の先祖は、樹上生活をしていたサルのうち、地上に降りて生活するようになった高等猿類の中から進化したものだと言われている。そういう進化論上の見地からも、地上生活者であるゴリラの方をチンパンジーより先に研究すべきではなからうか、と



1 左からチンパンジー、ロウランドゴリラ、マウンテンゴリラ、人のアシノウラ（シュルツによる）。

いうのが私たちの結論であった。

マウンテンゴリラとは？

ゴリラは一種二亜種に分類される。一つは西アフリカのカメルーンを中心にするロウランドゴリラ、もう一つは中央アフリカのキブ湖を中心としたごくかぎられた地域にいるマウンテンゴリラである。両種の区別は、大きなものではなく、ロウランドゴリラの体色が黒褐色な

のに対し、マウンテンは漆黒であり、足や毛が長く、頭の隆起も大きい。そして、オトナのオスには背から腰にかけて純白の毛がはえるのが特徴である。

この二種のゴリラのうち、どちらを選ぶかがまた問題なのだが、熱帯降雨林にいるロウランドゴリラよりも、高地にいるマウンテンゴリラの方が、気候条件や生息環境からいって調査が容易であろうというのが、今西・伊谷両氏の考えであった。そして、マウンテンゴリラの方が、ロウランドゴリラより進化しているのではないかと思われるふしがあった。それは蹠あしのうちが一つのより所であって、シュルツ博士の蹠あしのうちの比較がそれを教える。上図を見るとわかるように、チンパンジーの足は親指が長く、ものをつかむのに有利なようになっていて、手とひじょうによく似ている。ところが、ゴリラになると全部の指が短くなり、親指と第二指の間隔が狭くなって、人間の足に近くなっている。とくにマウンテンゴ